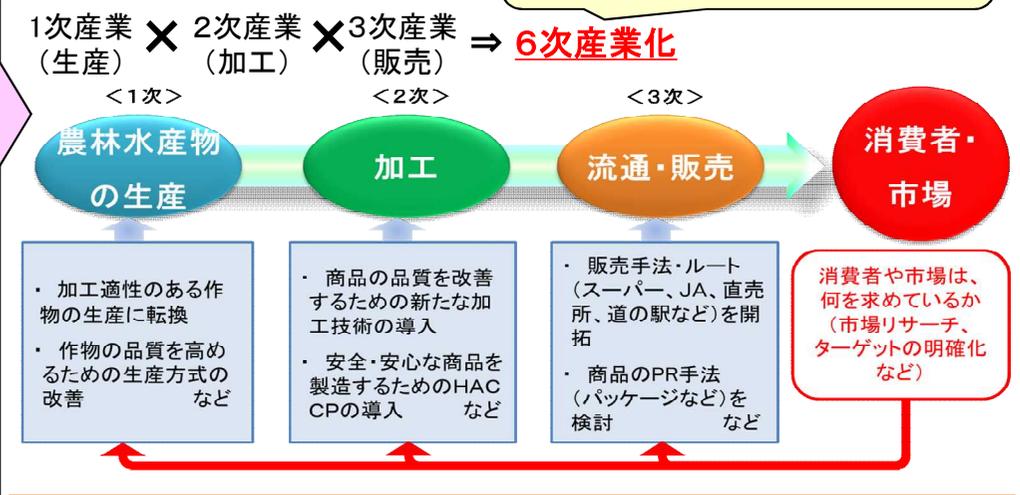
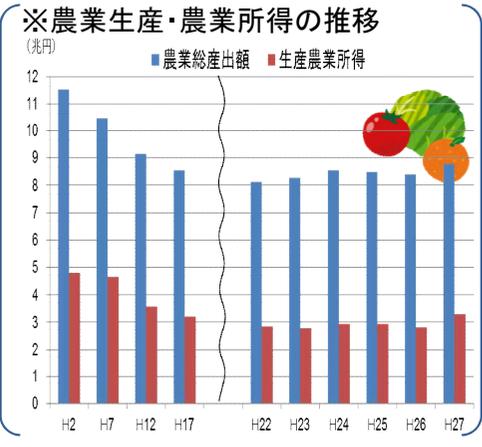


## 基調講演

演題：「農林漁業の6次産業化の推進について」  
講演者：農林水産省食料産業局 産業連携課長 高橋 仁志

「農林漁業(1次産業)と製造業(2次産業)と小売業等(3次産業)の事業との総合的かつ一体的な推進を図り、地域資源を活用した **新たな付加価値を生み出す**」取組

- 政策の目指すところ(目標)
- ◆ 所得の向上
  - ◆ 売上げ・収入の向上
  - ◆ 費用・コストの削減



- ☆ 6次産業化に取り組むにあたってのポイント・課題
- ・農林水産物の安定的確保、加工技術・ノウハウの修得、新たな販路開拓
  - ・農林漁業者にとってリスクの高い新事業創出をいかにサポートするか (行政課題)
  - ・農林漁業者だけでは事業展開が困難な部分が多い。地域の力を結集する必要
  - ・「出資」の仕組みも用意されており活用を促進 (A-FIVE)

## 意見交換(主な意見)

- ・個人の嗜好が多様化する中では、農業の6次産業化は、ブランディングを中心として付加価値が高いということをいかにアピールできるかが問題ではないか。
- ・農業は観光資源にもなるし、教育や環境、景観の観点からも取り上げられる。農業を様々な側面で分けて見える化していくことが大事。
- ・農業は、天候等のリスクを生産者が丸抱えしなくてはならない。組合等がリスクを分散してきたが、もっと大きな枠組みの中で農業や供給者側のランドデザインを描いていく必要があるのではないか。
- ・能登地域と有機農業には親和性がある。能登の一地域を、有機農業を行う地域にして、子どもたちに文明論まで教える学びの場にできれば良いのでは。
- ・農林水産業だけではなく、卸や仲卸、消費者などを含めて面的にどのように地域活性化をしていくかがポイント。また、生産性の向上についても様々な省庁が関わって取り組むべきであり、お金の面やアイデアの面など全員のチーム力で取り組まなくてはいけない。
- ・金融機関として意欲のある農業者に情報を提供していくことも大切な役割。また、販路拡大の観点で生産者と販売者のネットワーク作りも大切。
- ・A-FIVEや動産担保融資等によって外部との連携は進んでおり、6次産業化の取組も行われていることから、かつての農業における「作れば良い」という考えから徐々に変わってきていると感じる。

## 基調講演

演題：「地域資源を活用した農業の6次産業化の取り組み」  
講演者：株式会社 金沢大地 代表 井村 辰二郎



- ◆ 私たちのフィロソフィ「**千年産業を目指して**」
  - ・グローバル化の中でも有機農業を基盤とした地域の創生を目指す。
  - ・「Think Globally, Act Locally」
  - 「地域を理解して世界に向けて行動せよ」
  - 社員一丸、自分たちがどうあるべきかを常に考えている。
- ◆ 私たちのミッション
  - ① 耕作放棄地を積極的に耕す
  - ② 有機農業を通して日本の食料自給率の向上に貢献する
  - ③ 新規就農者の研修受入・育成を行う
  - ④ 農産業を通じて地域の雇用を創造する
  - ⑤ 農業を通じて東アジアの食料安全保障に貢献する

- ✓ 「農」とは耕作して植えるということ。「agriculture」の「culture」の語源は「cultivation」(=「耕す」)であり心や文化を耕すということ。農家にとっては「耕す」ことが最も大事。
- ✓ 農業こそ持続可能性があって、生物多様性を守るうえでこれから重要な産業になるという思いで就農。
- ✓ 30年後、40年後に「口(人口)」がなくなるマーケットに入っていくことがコメ農家の大きなテーマ。一方、世界の人口は増えている。輸出は使命。
- ✓ 1次産業は雇用創出型産業であるべき。地域での働き場所として大切。
- ✓ 地域資源を掘り起こし、これを大切にして事業化し、都市の方々、世界の方々に金沢・能登に来てもらう仕組みづくりを1次産業から考えていくことも、6次産業化なのではないか。